



好な仲間関係につながるのかどうかに関しては検討されていない。従って、実際の相互作用の多さと仲間関係に関連が認められるのかどうかについては課題として残されている。

これまで、子どもの仲間関係に関する多くの研究は、子どもの仲間内地位を検討するために、ソシオメトリック法に基づく社会的地位を利用してきた (Hay, Payne, & Chadwick, 2004)。これまでの研究では、仲間からの受容度の低い子どもや高い子ども、すなわち仲間内地位を測定するために、ソシオメトリック法の肯定的指名数を用いてきた。肯定的指名得点は、クラスの子ども一人一人に対して、一緒に遊びたい友だちをたずねるものであり、個人が仲間集団から好かれている（あるいは、嫌われている）程度を示すものである。一方、仲間集団からの受容度とは異なり、二者間の双方向的な関係を測定する方法としてフレンドシップ測定がある。ここでは、お互いに遊びたいと指名しあった仲間はフレンドシップ関係にあることを示している。Bukowski & Hoza (1989) は、幼児の仲間関係について検討する際には、仲間集団からの受容度と二者間の双方向的な関係に関して検討する必要があると指摘している。

仲間との相互作用と仲間集団からの受容度との関連を検討する際、仲間集団からの受容度を測定する測定として、肯定的指名得点で使用されてきた。Krantz (1982) は、幼児の社会的参加度を調べ、肯定的指名得点との間に  $r=.29$  の相関を見いだしており、同様に、Quay & Jarrett (1984) は、肯定的指名率 (%) と相互作用の頻度との間に  $r=.26$  の相関を見いだしている。また、Greenwood, Walker, Todd, & Hops (1979) は、課題作業場面と自由遊び場面に分けて観察し、相互作用率と肯定的指名得点との間に  $r=.29$  から  $.39$  の相関があったことを確認している。さらに、前田・泉 (1994) は相互作用のタイプと仲間内地位測定との関連を検討し、仲間からの受容度の高い幼児は、仲間への働きかけや協調遊びが多いことを明らかにしている。これらの研究は、相互作用の多い幼児ほど集団から受容されやすいことを示唆している。

上記の研究においては、相互作用を測定する行動指標として、働きかけや協調遊び、平行遊び、孤立遊び

といった社会的行動が測定されてきた。しかしながら、仲間への働きかけに対して相手から返答があり、その返答にさらに返答が返されるというような行動は指標とされてこなかった。したがって、これまでの研究では、実際に仲間関係の良好な幼児が、仲間に関与した際に返答が後続しているかに関しては検討されていない。従って、本研究では、幼児の相互作用を「働きかけに対して相手から言語的、非言語的に応答されること」と定義し、幼児の仲間関係と相互作用との関連を検討することを第1の目的とする。

仲間との相互作用の指標について本郷ら (1991) は、相互作用系列を用いている。相互作用系列とは、「相互作用の開始者が起した行動とそれに対する相手の行動」と定義されている。この相互作用系列では、ある子どもが仲間に対して働きかけたときに相手からの返答が返されなかった場合は、相互作用系列は生起しないことになる。従って、相互作用系列は、仲間に対する働きかけが仲間へ受け入れられたかどうかを意味している。また、深田ら (1999) は、相互作用系列において何回話者交代 (ターン) が行われたかを算出することによって、相互作用の持続の長さを検討している。すなわち、ターン数が増えることは相互作用が長く維持していることを示している。本研究では、相互作用の指標としてこの2つの指標を用いて、相互作用と仲間関係との関連を検討することとする。

さて、これまで、幼児の仲間との相互作用と仲間関係との関連について検討した研究においては、肯定的指名得点を使用されることが多く、二者間の双方向的な関係と相互作用との関連は検討されてこなかった。幼児にとって二者間の双方向的な関係を形成し、それを維持することによって、社会的・認知的コンピテンスに関連するスキルを学習したり、練習したりする重要な機会を得ること (Howes, Droege, & Matheson, 1994)、また、特定の友だち関係は、時間の経過とともにソーシャルサポートとして機能するようになるという実証的研究 (Rizzo & Corsaro, 1995) もある。従って、実際に相互作用を行うことが、二者間の双方向的な関係の形成や維持に影響するののかどうかについても検討する意義はあると考えられる。このようなことから、本研究では、幼児の集団からの受容度と仲間との相互作

用との関連だけではなく、これまでの研究ではほとんど検討されてこなかった2者間の双方向的な関係と相互作用の関連について検討することを第2の目的とする。さらに、肯定的指名数や2者間の双方向的な関係を形成している幼児の数が多い幼児と少ない幼児において、相互作用系列数およびターン数に時間の経過に伴う変化がみられるかどうかを検討することを第3の目的とする。

## 方 法

### 1. 参加児

H市内の保育園の年中クラス24名（男児10名，女児14名；平均4歳10ヶ月）。

### 2. 観察時期

行動観察は、幼児の行動を短期縦断的に検討するために、2回に分けて行った。Time 1は、2004年6月下旬から7月に実施し、Time 2の観察は、Time 1の観察から6ヶ月後の2005年1月に実施した。観察頻度は1週間に1～2回、1ヶ月に4～6回程度であり、いずれも午前中に行った。

### 3. 行動観察の手続き

保育に参加しない「観察者」の立場をとり、VTR撮影による自由活動場面の行動観察を行った。行動観察は大学院生1名と学部学生1名の2名で行い、行動観察を行う幼児の順番に関しては、名簿からランダムに選出した。行動観察はすべての幼児に対して6月から7月と1月のそれぞれの時期において、1回10分間の観察を2回行った。1回目と2回目の観察は別々の日に実施した。行動観察においては、仲間への働きかけ場面を対象としたため、担任保育士の話を聞く場面や道具を片付ける場面は記録として残さなかった。行動観察にあたっては、参加児と一緒に活動している仲間がすべて撮影できること、参加児の表情がわかること、などの基準を満たす位置から参加児の行動をVTRに収録した。ビデオ収録された記録は、大学院生1名と学部学生1名の2名の観察者によって分析された。2名の観察者は、同じ時間帯でコード化を行うために、10秒間隔でブロック数が吹き込まれている録音テープを再生して分析した。この分析方法は観察者バイアスを

生じさせにくく、信頼性を確立できることがSuen & Ary (1989) により示されている。この分類の練習によって、観察者間一致率が80%を超えたところで本研究の行動観察者とした。なお、最終的な働きかけの一致率は82%、応答は95%であり、本研究の一致率は満足できる一致であると考えられた。

## 4. 測度

### (1) 肯定的指名数

クラスの友達から遊びたいと思われているかを検討するために、ソシオメトリック測度のなかの肯定的指名法を用いた。従来の方法では、「一緒に遊びたいお友だち」と「一緒に遊びたくないお友だち」についてそれぞれ3名を選ばせているが、本研究では、倫理的問題を配慮して、「一緒に遊びたいお友だち」についてのみ尋ねることとした。

手続き 肯定的指名数は、2005年1月（行動観察におけるTime 2と同時期）に実施された。Ladd, Price, & Hart (1990 山崎・中澤監訳 1996) は、子どもの以前の行動は現在の社会的地位に影響を及ぼすけれども、子どもの以前の社会的地位が現在の行動に影響することはないことを示している。従って、Time 1の相互作用がTime 2の社会的地位に影響するかどうかを検討するために、この時期に肯定的指名数の測定を実施することにした。肯定的指名数は、「一緒に遊びたいと思うお友だちを3名まで教えてください」と記述された記入用紙を担当保育士に配布し、子ども一人ひとりに聞いていただくよう依頼した。肯定的指名数の得点化の方法は、中台・金山・前田 (2002) を参考にした。まず、参加児ごとにTime 2の時点で仲間から受けた指名数を集計した。指名数について本人を除くクラスの仲間数で除算し、仲間1人あたりからの指名数を算出した。

### (2) 相互選択数

2者間の双方向的な関係と相互作用について検討するために、仲間指名法において、「一緒に遊びたいお友だち」としてお互いに指名しあった友だちの数を算出し、相互選択数とした。相互選択数の得点化の方法は、Gest, Graham-Bermann, & Hartup (2001) を参考にし、Time 2において、参加児ごとにお互いに指名しあった仲間の人数を算出した。

(3) 相互作用系列とターン

本研究では、働きかけに関連した応答が次々と継続することによって形成される相互作用を相互作用系列とした。具体的には、働きかけに対して、相手が応答を行った場合は、相互作用が継続したとみなし、相手が無反応であった場合は、相互作用が終了したとみなした。このようにして定義された1つの相互作用系列のなかで、何回の話者交代(ターン)が行われたかを、深田ら(1999)を参照にして求めた。つまり、働きかけに続いて応答がなかった場合を0ターン、相手から応答が返された場合を1ターン、この応答を受けた相手がさらに応答を返したときには、応答が返される度にターン数が増えることと定義した。非言語的な応答が行われたときには、相互作用系列は継続しているとみなすが、ターン数としては算出しなかった。

結果

1. 肯定的指名数と相互選択数の平均値と標準偏差および性差

Table 1は、肯定的指名数と相互選択数の平均値と標準偏差を示したものである。肯定的指名数には男女差が認められ、男児の方が女児よりも仲間指名数が高かった( $t(22)=2.80, p < .01$ )。相互選択数には、男女差は認められなかった。

Table 1 肯定的指名数と相互選択数の平均数と標準偏差

	男児 n=9	女児 n=15	t 値
	平均	平均	
肯定的指名数	2.67 (1.66)	1.27 (0.80)	2.80**
相互選択数	0.44 (0.53)	0.67 (0.72)	0.80n. s.

\*\* $p < .01$

2. 肯定的指名数の高群・低群における相互作用系列数とターン数の変化

クラスの仲間から遊びたいと指名される子どもは、Time 1からTime 2にかけて相互作用系列数とターン数に変化がみられるのかどうかを検討した。肯定的指

名数には、男女差が認められたため、以下の分析では、男女別に検討を行った。

Table 2は、男児における肯定的指名数の高群と低群の相互作用系列数とターン数の平均値と標準偏差を示している。Time 2における肯定的指名数の男児の平均点を基準として、高群と低群の2群に分類し、各群と行動観察時期を要因として、相互作用系列数を従属変数とした2(群)×2(測定時期)の2要因の分散分析を行った。分析の結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった。次に、ターン数を従属変数とした2(群)×2(測定時期)の2要因の分散分析を行った。その結果、群の主効果に有意な傾向が認められ( $F(1,7)=4.47, p < .10$ )、高群は低群よりもターン数が多い傾向にあることが示された。

Table 2 男児の肯定的指名数高群・低群における相互作用系列数とターン数および標準偏差

	高群 n=5		低群 n=4		時期	群	交互作用
	Time1	Time2	Time1	Time2			
	平均	平均	平均	平均			
相互作用系列数	3.40 (2.41)	7.20 (5.48)	2.13 (2.53)	3.63 (1.49)	2.48n. s.	2.25n. s.	0.47n. s.
ターン数	1.45 (0.94)	1.04 (0.30)	0.64 (0.74)	0.59 (0.06)	0.57n. s.	4.47+	0.37n. s.

† $p < .10$

Table 3は、女児における肯定的指名数の高群と低群の相互作用系列数とターン数の平均値と標準偏差を示している。女児に関しても男児と同様に、Time 2にお

Table 3 女児の肯定的指名数高群・低群における相互作用系列数とターン数および標準偏差

	高群 n=10		低群 n=5		時期	群	交互作用
	Time1	Time2	Time1	Time2			
	平均	平均	平均	平均			
相互作用系列数	2.30 (2.18)	5.40 (2.89)	3.80 (2.41)	4.30 (2.28)	3.59+	0.04n. s.	1.87n. s.
ターン数	0.81 (0.55)	1.25 (0.53)	1.24 (0.56)	1.12 (0.63)	0.52n. s.	0.52n. s.	1.62n. s.

† $p < .10$

ける肯定的指名数の女児の平均点を基準として、高群と低群の2群に分類し、各群と行動観察時期を要因として、相互作用系列数を従属変数とした2(群)×2(測定時期)の2要因の分散分析を行った。分析の結果、時期の主効果に有意な傾向がみられ( $F(1,7)=3.59, p<.10$ )、Time 1よりもTime 2の相互作用系列数が多かった。次に、ターン数を従属変数とした2(群)×2(測定時期)の2要因の分散分析を行った。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった。

#### 4. 相互選択数の高群・低群における相互作用系列数とターン数の変化

相互選択数の多い子どもと少ない子どもでは、Time 1からTime 2にかけて相互作用系列数とターン数に変化がみられるのかを検討した。Table 4は、相互選択数の高群・低群における相互作用系列数とターン数の平均値と標準偏差を示している。はじめに、相互選択数の平均点を基準として、相互選択数高群と低群の2群に分類した。次に、各群と行動観察時期を要因として、相互作用系列数を従属変数とした2(群)×2(測定時期)の2要因の分散分析を行った。分析の結果、主効果がみられ、Time 1よりもTime 2の相互作用系列数が多く( $F(1,22)=8.53, p<.01$ )、高群が低群よりも相互作用系列数が多い傾向が認められた( $F(1,22)=3.71, p<.10$ )。また、交互作用はみられなかった。次に、ターン数を従属変数とした2(群)×2(測定時期)の2要因の分散分析を行った。その結果、交互作用に有意傾向が認められ( $F(1,22)=3.32, p<.10$ )、高群はTime 1のほうがTime 2よりもターン数が多かった。

相互選択数高・低群における相互作用系列数とターン数および標準偏差

Table 4

	高群 n=12		低群 n=12		時期	群	交互作用
	Time1	Time2	Time1	Time2			
	平均	平均	平均	平均	F 値	F 値	F 値
相互作用系列数	3.67 (2.55)	5.92 (4.19)	1.96 (1.66)	4.58 (2.20)	8.53 **	3.71†	0.05n. s.
ターン数	1.23 (0.79)	0.99 (0.44)	0.78 (0.54)	1.15 (0.56)	0.16n. s.	0.63n. s.	3.32†

† $p<.10$ , \*\* $p<.10$

## 考 察

本研究では、仲間関係と幼児の仲間との相互作用との関係について検討することを目的とした。本研究で得られた結果は以下の通りであった。①仲間集団からの肯定的指名数が多い幼児と少ない幼児では、実際の保育活動場面における相互作用の頻度に違いはみられなかった。②仲間集団からの肯定的指名数が多い男児と少ない男児とでは、相互作用におけるターン数に違いがみられ、仲間からの肯定的指名数の多い男児は、相互作用が長く続いていた。③双方向的に遊びたいと思っている仲間が多い幼児は、少ない幼児よりも実際の保育活動場面において相互作用を多く行っていた。④双方向的に遊びたいと思っている仲間が多い幼児と少ない幼児では、相互作用におけるターン数に違いはみられなかった。

本研究では、肯定的指名数に男女差がみられた。幼児の仲間関係に関する研究においては、肯定的指名数に男女差がみられていることから(前田,2000;中台・金山・前田,2002)、本研究でみられた男女差は、先行研究と一致するものであったといえる。

まず、仲間集団からの肯定的指名数と相互作用の頻度との関連について考察する。本研究では、相互作用の定義を「働きかけに対して応答が返されること」として仲間関係との関連を検討した。当初、クラスの多くの仲間に働きかけ、仲間から応答を得ている幼児、すなわち相互作用の頻度の多い幼児は、仲間集団からの肯定的指名数が多いだろうと予測した。しかしながら、クラスの友だちから遊びたいと指名されることの多い幼児が、相互作用の頻度を多く示しているという結果は得られなかった。このような結果が得られた理由は、幼児の働きかけと応答の発達にある可能性が考えられる。岡村・杉山(2006)は、幼児の働きかけと応答の発達の变化について検討した結果、幼児は、相互作用の頻度の多少に関わらず、時間の経過に伴って働きかけに対して応答を返すようになることを示している。このことは、働きかけに対して応答を返すことはこの時期の幼児に獲得されたものであるため、相互作用の頻度に多少があつたとしても、相互作用の多さのみで仲間集団からの受容度の高さは決定されないこ

とが示唆された。Hay et al.(2004)は、仲間からの受容度に影響する個人の要因として、玩具を分け与えることができることや、困っている仲間を助けることができるというように向社会的行動を獲得していること、攻撃行動や引っ込み思案行動を示す頻度が少ないことを要因としてあげている。従って、今後はこのような要因も含めた更なる検討が必要である。

次に、肯定的指名数と相互作用のターン数との関係についてみてみると、仲間集団から受容されている男児は、相互作用が長く続いていることが明らかにされた。このような結果が得られた理由を男児の遊びの発達的变化と関連させて考察する。Hay et al.(2004)は、男児の遊びについて研究を行っており、男児が発達とともに集団での協調遊びを好むようになると指摘している。男児が仲間と一緒に活動し、遊びを維持するためには、相互作用が長く続く必要がある。このことから、遊びのなかで相互作用が持続する男児（ターン数の多い男児）は、仲間からの受容度が高まることが考えられる。岡村・杉山（印刷中）は、仲間と活動し、遊ぶことができる男児は、教師から社会的スキルが高いと評価されていることを指摘しており、男児にとって集団遊びのなかで相互作用が維持できることは、仲間からの受容度だけでなく、社会的スキルに関する教師の評価にも関連する要因であることが示唆された。

さて、本研究では、2者間の双方向的な関係の形成と相互作用の関連を検討したところ、多くの幼児と双方向的な関係を形成している幼児は、相互作用の頻度が多いことが明らかにされた。本研究で得られた結果は、Vaughn, Azria, Krzysik, Caya, Bost, Newell, Wanda, & Kazura(2000) および Vaughn, Colvin, Azria, Caya, & Krzysik(2001)の研究においても認められていた。彼らの研究では、お互いに肯定的指名を行った幼児同士は、そうでない幼児よりも相互作用を多く示しており、相互作用の相手を特定したところ、肯定的指名をした幼児との相互作用が頻繁に行われていたことが明らかにされている。本研究では、相互作用を行った幼児を特定していないため、どのような幼児と相互作用を行っているかに関しても検討する必要がある。そのような検討を行うことによって、2者間の双方向的な関係を形成している幼児とそうでない幼児との相互作用の

違いが明らかにされると考えられる。

さて、本研究では、2者間の双方向的な関係を形成している幼児は、相互作用が長く持続していることが予測されたが、そのような結果は得られなかった。この理由についてフレンドシップ研究の結果から考察する。Hay et al.(2004)は、2者間の双方向的な関係を形成する幼児は、お互いの好みや行動特徴が類似しており、途中で関係が崩壊することなく時間の経過とともに安定するようになると指摘している。このことから、双方向的な関係の形成には、相互作用がどのくらい長く続くかというような量的な側面よりも、お互いの興味関心の類似性のような質的な側面が強く影響している可能性が考えられた。この点に関しては、今後の課題として残されている。

以上のことから、本研究で得られた結果をもとに、仲間集団からの受容度と2者間のフレンドシップ関係の形成に影響する相互作用についてまとめると、仲間集団からの受容度には、相互作用の長さが影響し、2者間のフレンドシップ関係の形成には、相互作用の頻度の多さが影響しているといえる。また、仲間集団からの受容度を高めるためには、協調的遊びに参加することが前提条件となるのに対して、2者間のフレンドシップ関係の形成には、行動特徴や好みの類似性が関連することが明らかにされた。このように仲間集団からの受容度と2者間のフレンドシップ形成には、異なる要因が影響していることが示された。

さて、本研究では、幼児の相互作用をTime 1とTime 2の2時点で観察し、肯定的指名数および相互選択数における高群・低群の相互作用系列数およびターン数において、Time 1からTime 2の変化の仕方に違いがあるかを検討した結果、高群・低群には明確な差は認められなかった。Time 1からTime 2にかけての時間経過をみてみると、相互作用系列数は、Time 1よりもTime 2に増加がみられ、先行研究（岡村・杉山, 2006）と一致する結果が得られた。しかしながら、ターン数には、時間の経過に伴う増加がみられなかったことから、ターン数の増加は時間の経過と関連がないことが明らかにされた。

最後に、本研究では、2者間の双方向的な関係を測定する方法として、お互いに肯定的指名を行った幼児

の人数を指標として用いた。この指標は、一緒に遊びたいと考えている幼児だけでなく、日常的に保育活動場面で活動を共にしている幼児を示している可能性がある。また、相互選択数の平均値そのものが小さく、床効果を示している可能性もあることから、本研究で使用した指標そのものの妥当性を検討することが必要であり、その際には、より大きな集団を対象とする必要がある。

また、本研究の結果からは、仲間集団からの受容度や2者間の双方向的な関係の形成には、相互作用の持続性や相互作用の頻度が直接的な影響を与えない可能性も考えられた。Hay et al.(2004) は、子どもの行動特徴や遊びの興味・関心の類似性が仲間集団からの受容度や2者間の双方向的な関係の形成に影響を及ぼすことを指摘している。従って今後の研究においては、これらの変数を新たに加えて、仲間集団からの受容度や2者間の双方向的な関係の形成に直接的あるいは間接的に影響を及ぼす変数を検討することが必要である。

## 謝 辞

本研究にあたりご協力いただきました保育園の諸先生方ならびに園児の皆様にご心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- Bukowski, W. M., & Hoza, B. (1989). Popularity and friendship: Issues in theory, measurement, and outcome. In T. Berndt & G. Ladd(eds.), *Peer relationships in child development*. New York: Wiley. Pp.15-45.
- 深田昭三・倉盛美穂子・小坂圭子・石井史子・横山順一(1999) 幼児における会話の維持: コミュニケーション連鎖の分析 発達心理学研究, 10, 220-229. (Fukada, S., Kuramori, M., Kosaka, K., Ishii, F., & Yokoyama, J.)
- Gest, S. D., Graham-Bermann, S. A., & Hartup, W. W. (2001). Peer experience: Common and unique features of number of friendships, social network centrality, and sociometric status. *Social Development*, 10, 23-40.
- Greenwood, C.R., Walker, H. M., Todd, N. M., & Hops, H. (1979) Selecting a cost-effective screening measure for the assessment of preschool withdrawal. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 12, 639-652.
- Hay, D. F., Payne, A., & Chadwick, A. (2004). Peer relations in childhood. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 45, 84-108.
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子(1991) 子ども間のトラブルに対する保母の働きかけの効果—保育所における1～2歳児の物をめぐるトラブルについて— 発達心理学研究, 1, 107-115. (Hongo, K., Sugiyama, H., & Tamai, M.)
- Howes, C., Droege, K., & Matheson, C. C. (1994). Play and communicative processes within long- and short-term friendship dyads. *Journal of Social & Personal Relationships*, 11, 401-410.
- Krantz, M. (1982). Physical attractiveness and popularity: A predictive study. *Psychological Reports*, 60, 723-726.
- Ladd, G.W., Price, J.M., & Hart, C.H. (1990). Preschooler's behavioral orientations and patterns of peer contact: Predictive of peer status? In S.R. Asher, & J.D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. US: Cambridge University Press, pp.90-115. (アッシャー, S.R., & クーイ, J.D. 山崎晃・中澤潤(監訳) (1996). 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ— 北大路書房)
- 前田健一(2000). 幼児の仲間関係に関する研究: 自由遊び場面の仲間相互作用とソシオメトリック地位 愛媛大学教育学部紀要 教育科学, 46, 53-66. (Maeda, K.)
- 前田健一・泉あかね(1994). 幼児の仲間関係に関する研究—仲間相互作用の行動観察分析—愛媛大学教育学部紀要 教育科学, 40, 45-55. (Maeda, K., & Izumi, A.)
- 中台佐喜子・金山元春・前田健一(2002). 幼児の仲間集団における人気度と社会的スキル—同性仲間と異性仲間からの評価— 広島大学心理学研究, 2, 151-157. (Nakadai, S., Kanayama, M., & Maeda, K.)

- 岡村寿代・杉山雅彦 (2006) 幼児の相互作用を促す働きかけに関する研究－行動連鎖の分析－日本行動療法学会第32回総会発表論文集, 156-157.
- 岡村寿代・杉山雅彦 (印刷中) 幼児の社会的スキルを測定する教師評定と行動観察者評定の関連について パーソナリティ研究, 15.
- Quay, L.C., & Jarrett, O.S. (1984) Predictors of social acceptance in preschool children. *Developmental Psychology*, 20, 793-796.
- Rizzo, T. R., & Corsaro, W. A. (1995). Social support processes in early childhood friendship: A comparative study of ecological congruences in enacted support. *Journal of Community Psychology*, 23, 389-410.
- Suen, H., & Ary, D. (1989). Analyzing quantitative behavioral observation data. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Vaughn, B. E., Colvin, T. N., Azria, M. R., Caya, L., & Krzysik, L. (2001) Dyadic analyses of friendship in a sample of preschool-age children attending head start: Correspondence between measures and implications for social competence. *Child Development*, 72, 862-878.
- Vaughn, B. E., Azria, M. R., Krzysik, L., Caya, L. R., Bost, K. K., Newell, Wanda., & Kazura, K. L. (2000) Friendship and social competence in a sample of preschool children attending head start. *Developmental Psychology*, 36, 326-338.